

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】 藤本拓也

【所属】 (助成決定時) 東京大学大学院人文社会系研究科

【研究題目】

エミール・シオランの宗教思想の研究—現代における無神論と信仰の再定義の試み—

【研究の目的】

ルーマニアに正教会司祭の息子として生まれたフランスの思想家エミール・シオラン(1911~1995)は「信仰なき神秘家」「神なき神秘家」と自己規定し、無信仰という立場にとどまりつつ、一方で神を求め続け、神秘経験(エクスタシー)と鬱(メランコリー)という自身の体験に根ざした特異な思想を展開した。本研究は、シオランのニヒリズム的思索を、信／不信や有神論／無神論といった思弁的な水準での二分法では捉えられない神への欲望として提示し、宗教思想として把握することを目的とした。断章形式を使用するシオランの思索は、神への愛と憎しみ、存在と非存在といった二項のあいだを揺れ動き、確固たる結論が示されることはなく、一見矛盾しているように見える。だが、否定形であれ肯定形であれ、シオランの神への情動そのものに着目し分析することで、二分法的思考とは異質なシオランの宗教的思索を析出することが可能になる。また、シオランの宗教的思索を分析することによって、鬱や自殺念慮など心の病の問題や、現代日本のスピリチュアリティと呼ばれうる現象にも見られるような「本来的自己」や「内的霊性」を求める心性の分析にも繋げていくことを目指した。

【研究の内容・方法】

Simona Modreanu(*Le Dieu paradoxal de Cioran*, Éditions du Rocher, 2003)や、Constantin Zaharia(*La parole mélancolique. Une archéologie du discours fragmentaire*, Villeneuve d'Ascq, Presses Universitaires du Septentrion, coll. Thèse à la carte, 1999)による最新の研究も含めて、従来のシオラン研究は、神や宗教に対するシオランの攻撃的な側面を、無神論や宗教批判として理解している。だが、そうしたアプローチでは、シオランの神への情動や執着を把握することは困難である。そのため本研究では、第一に、メランコリー(鬱)と無信仰との関係を考察し、シオラン思想を信／不信の概念枠では捉えられない宗教思想として提示する方法を探った。それは、「神なき神秘家」とシオランが自称する際の、この「神の無さ=不在」は彼にとっていかなる事態であったのかという根本的な問いに、心理学的、存在論的側面から迫り、その思想的意義を解明することでもある。

本研究が注目したシオランの神への情動とは、愛や喜びのような肯定的なものではなく、むしろ神への怒りや憎しみなど強い否定的情動である。この際、主として参照したのは、フロイトの論文「喪とメランコリー」(1917年)において示された鬱と喪失に関する議論である。それにより、神への怒りや憎しみ、神に遺棄された孤独感といった否定的情動や、空虚や絶望などの鬱的情動、あるいは無信仰でありながら神を求め続ける欲求など、一見矛盾するようなアンビヴァレントな神への態度を、喪失された愛の対象への情動として捉え直し、シオランの思想を「神の死」以降において不在の神を探求する宗教思想として分析した。すなわち、神秘経験や鬱状態における感覚や情動の強度そのものにおいて神を見いだすシオランの志向を析出した。

第二の研究内容として、シオランの鬱的情動と神への情動との関係に着目した。シオランは、神への志向を「祈りへの欲求」として表明しつつ、罪責感や自殺念慮といった鬱的情動を感じていもいる。シオランがこうした否定的情動からいかに回復し、自己受容を果たしたか、その過程を検討することにより、鬱状態における宗教的救済の可能性を探った。具体的には、自殺予防理論や精神分析といった精神病理学的アプローチによって、自殺念慮における自己受容や、鬱の自責感からの救済の可能性について研究を進めた。また、鬱における救済という問題系の宗教的背景を明らかにするため、「無」「空虚」「孤独」「アケーディア」「無名性」「無用性」といった概念の意味領域を思想史のアプローチによって解明した。こうした方法により、自殺念慮から自己受容への経路について考察した。

【結論・考察】

上記の研究方法によって、生涯にわたり神を求めながらも信仰に安んじることのできなかつたシオランの思想を宗教思想として位置づけ直した。そして、従来の信／不信という概念枠や無神論というカテゴリーでは捉えることができないシオランの思想とは、神の存在ないし非存在を——存在者のレベルで——存在論的に思考するものではなく、むしろ自らの経験や情動の強度そのものに根ざすものであり、不在であれ現前であれ神がいかに感じられるかという神への情動をその核心とする宗教的思索であることを明らかにした。同時にまた、今日、「靈的」なるものが人間にもつ意味と可能性を批判的に検討するため、「内的靈性」や「本来的自己」を求めるスピリチュアリティという現象の宗教思想的な考察を行った。そこでは、シオランの靈性概念を、メランコリーの情動において神の喪失と神の遺棄を感じ取り、その孤独の極限において、同じく孤独である神と自身との二人だけという主体の在り様として把握した。言い換えれば、それは、無信仰という立場で神を求めたシオランにおいて、神を感じる主体の在り様であり、また超越と繋がりうる主体の在り様である。加えて、こうしたシオラン思想の解釈を通して、現代日本で深刻な問題となっている鬱や自殺という精神病理学的問題にアプローチした。それは、シオランにおける鬱と無信仰との関わりを分析することで、自殺念慮における自己受容の在り様を探り出すことである。こうしたシオラン思想の様相は、自らを超えた存在との繋がりから人間存在を眼差し、現代の諸問題に深く関わりながら生きる人間の救済に向けた信仰の意味を探求していくという意味で、宗教学的に重要な意味をもつものである。